

〔目的〕女性の生き方は多様化し、さまざまな選択肢が用意されている。生涯周期（ライフ・サイクル）の第1期の終期にある青年女子は、教育期を終え社会人として出発している時に、自己の人生をどのように設計しているのだろうか。近年では、生涯発達の視点から、アイデンティティの問題は、従来の青年期特有のテーマというよりも、生涯にわたるテーマであり、青年期から中年期を経て老年期へと、どのように変化していくのかが、注目されている。本研究では、女子短大生と、一世代前の彼女たちの母親を対象として、青年期から老年期にいたる各時期をどのように位置付けているかを探る。

〔方法〕対象者は、私立女子短期大学家政科2年生91名とその母親74名である。文章完成法により資料を得た（回収率は学生群100%、母親群81.3%）。

〔結果〕①20歳は「仕事」、30歳は「結婚後数年で子育てと仕事で多忙」、65歳は「旅行・趣味を楽しむ」が、娘・母親の両群とも最も多い。45歳は両群で意見が分かれ、娘群は他の時期に比べて分散し、母親群は幸福感・充実感を表明する。②結婚・子育て・家庭生活については、母親群は肯定的積極的ニュアンスとともに否定的消極的ニュアンスも表明するが、娘群では肯定的積極的ニュアンスに大きく片寄っている。③母親群はライフ・サイクルの各期及び仕事・生きがいについては饒舌で、より明確な積極的ニュアンスを表わすが、結婚・子育て・家庭生活については娘群の方が饒舌である。④世代交互の捉え方は、母親は娘のわがままをやや批判しながらも恵まれていて自由であると羨望をもって眺め、娘は母親の人生を苦勞はしたが幸せだろうと同情を寄せている。